

1 「他者の意図を理解する力を育てる指導」～SCERTSモデルを活用した実践～
岡山大学教育学部附属特別支援学校 教諭 角原佳介

本発表は、他者への関心が低く、他者を介して状況を理解することに難しさのある小学部4年生の児童に対して、SCERTSモデルを活用して行った実践をまとめたものである。実践を通じた児童の変化と、学校現場でのSCERTSモデルの有用性について発表する。

2 「おいしいチャーハンを作るには ～自分で考える家庭科の取組～」
高知大学教育学部附属特別支援学校 教諭 安岡知美・片山裕吾

毎週の家庭科食学習で培ったスキルを活かし、生徒それぞれが具や量、彩り、栄養バランスを考えてチャーハンを作る。他者からの評価をもらうことで、よりおいしく、健康的な食事を作ることを自ら考える家庭科の取組である。

3 「主体的・協働的な学びを育む支援」におけるICT活用
東京学芸大学附属特別支援学校 教諭 齋藤大地

「主体的・協働的な学び」とICTとの親和性は高く、ICTを活用した授業実践の結果、「主体的・協働的な学び」のポイントとして、幼稚部から高等部まで共通して、自己の経験の振り返りや他者の経験への関心が挙げられた。

4 知的障害教育の各教科を通じた資質・能力の育成を目指す授業づくり
～各教科の見方・考え方を働かせ、生き生きと学ぶ～
静岡大学教育学部附属特別支援学校 教諭 加茂聡

本校では、各教科の見方・考え方を働かせることを通して、資質・能力の育成を目指して授業づくりに取り組んでいる。本校研究の概要を発表する。

5 知的障害教育の各教科を通じた資質・能力の育成を目指す授業づくり
～言葉による見方・考え方を働かせた小学部の実践～
静岡大学教育学部附属特別支援学校 教諭 加茂聡

本校では、各教科の見方・考え方を働かせることを通して、資質・能力の育成を目指して授業づくりに取り組んでいる。具体的には、単元デザインシートを使ってきた。本発表では、小学部の国語の実践を発表する。

6 知的障害教育の各教科を通した資質・能力の育成を目指す授業づくり
～数学的な見方・考え方を働かせた中学部の実践～

静岡大学教育学部附属特別支援学校 教諭 中村真

本校では、各教科の見方・考え方を働かせることを通して、資質・能力の育成を目指して授業づくりに取り組んでいる。具体的には、単元デザインシートを使ってきた。本発表では、中学部の数学の実践を発表する。

7 生徒が自分の手で「願い実現」していく「作業単元学習」の実際

信州大学教育学部附属特別支援学校 教諭 濱嶋健二

私たちは、児童生徒が自らの力をじゅうぶんに発揮し、主体的に取り組む生活を今と将来にわたって実現する児童生徒の育成を願っています。その手立てとして、子どもたちの生活の中から生まれた「願い」を自分たちの手で実現していく「作業単元学習」の取り組みについて、授業の仕組み、願いの単元化、事例を通してお伝えしたいです。

8 育成を目指す資質・能力と知的障がい教育の学び

～これからの函館で自分らしく生きるための学びのデザイン～

北海道教育大学附属特別支援学校 教諭 齊藤留美

本校の研究では、「函館でどのような子どもを育てるか」を、学校・地域で話し合い、本校で育成を目指す資質・能力を検討した。それらの資質・能力の育成に向けて、授業づくり、授業改善をしながら、知的障がい教育の学びの在り方を明らかにしていきたい。

9 知的障害のある児童に対する授業づくりの研究

—サーキット運動の指導を通して—

東京都立王子特別支援学校 教諭 伊藤曜子

知的障害特別支援学校・特別支援学級の体育科の授業づくりに役立つ知見を得ることを目的とした。本研究で行うサーキット運動において、児童の新しい行動形成の支援にプロンプトが効果を示すか授業実践を行った。

10 知的障害のある生徒の人間関係形成能力を育むための指導法に関する一考察

広島県立福山北特別支援学校 教諭 時光秀明

人間関係形成能力に関して、生徒の自己理解と教員の生徒理解のズレを比較検討した。生徒が自身を客観的に見る力が弱いことから、自己理解を促すための指導の必要性があることが考えられた。

11 高等部における、勤労観・職業観を高める授業づくり

千葉大学教育学部附属特別支援学校 教諭 新妻翔太郎

高等部における、勤労観・職業観を高める授業づくりについて、チェックリストを活用しながら、作業学習と職業/家庭におけるつながりについて考察を行い、発達段階に応じた支援の方向性を検討した。

12 高等部道徳におけるカリキュラム・マネジメントの一考察

山梨県立かえで支援学校 教諭 山下英志

本校高等部は、道徳を時間における指導として位置づけ各学年3グループで実施している。学校行事や生徒指導部等で扱っている内容と道徳の時間の指導を関連づけた、指導計画を一考察する。

13 高等部保健体育における授業実践の報告

山梨県立かえで支援学校 教諭 広瀬裕也

本校高等部では、保健体育を3学年合同、4グループに分けて実施している。今年度は、武道領域の剣道の位置づけとして、「スポーツチャンバラ」を取り入れた。「スポーツチャンバラ」の授業の指導計画と実践、評価観点を含めて報告する。

14 小学部における主権者教育の実践

～学部長選挙（児童生徒会役員選挙）への取り組みを通して～

山梨県立わかば支援学校 教諭 小宮山いづみ・大塚美鈴
中込千恵・横森汐理

知的障害特別支援学校小学部5年生3学期の、進級に関する生活単元学習での単元の中で実践した学部長選挙への取り組みについて、「選挙」について学習していくための手だてや、単元全体を通しての児童の成長についてまとめた。

15 知的障害特別支援学校の若手教師支援に関する調査研究

ストレス状況や他教師等からのサポート状況の実態

宮崎義成（NPO法人あおぞら）・杉岡千宏（東京学芸大学大学院）・
李受眞（東京学芸大学大学院）・橋本創一（東京学芸大学教育実践研究支援センター）

5年以下の教師を対象に質問紙調査を実施した。その結果、他教師や保護者との関係作り上でのストレスに関する自由記述が130件前後挙げられ、他方で校内のサポート環境の整備度は低いと感じる者が多い傾向にあった。今後、身近な先輩教師などがメンターの役割を果たしていく組織的体制の整備が一層求められる。

16 『自ら学ぶ子どもが育つ授業』

～単元名「気温と天気の変化」での取組を通して～

山梨県立わかば支援学校 教諭 海野恭史・清水亜希子・佐野愛
宮崎憲一・小野由香里・原満登里

マイチャレンジ（各教科等を合わせた指導）における本単元を通して、生徒が天気や気温の変化について生活上の課題を解決する方法を見つけ、学んだことを生かせるようになるために、主体的・対話的で深い学びの視点で単元計画や手だてを検討した授業実践を紹介する。

17 「自閉症スペクトラム障害児における皮肉理解の特徴

～定型発達児との比較を通して～

山梨県立ふじざくら支援学校 教諭 土屋勇太

ASD児における皮肉の理解能力の更なる探索のため、定型発達児を対象に、比喩皮肉テストと成人表情認知検査を実施した。結果、定型発達児の比喩理解能力は、対象児の暦年齢に強く規定されていたが、皮肉理解能力は対象児の暦年齢のみでは説明されないことが明らかとなった。

18 『生活単元学習「買い物しよう！」の実践』

甲府市立甲府北中学校 教諭 雨宮瑞穂

実態差が大きい知的障害学級の3名の生徒に対して、コンビニで一人で買い物ができることを目標に、生単の時間だけでなく、お金の計算は数学で、買い物の仕方は社会科でと教科とも関連させ総合的に取り組んだ実践。教室内に実際に商品を並べて、店員役の生徒には接客やレジ打ちをさせ、お客の生徒は本物のお金で買い物の模擬体験ができるように工夫した。

19 「すべての子どもたちの学びを支えるために」～通級による指導～

甲府市立新田小学校 教諭 河野美保子・古屋貴代美

甲府市で初めて設置された本サポートルームは、今年で6年目を迎えました。通常の学級に在籍している、学習面や行動面・友だちとのコミュニケーションに何らかの困難を抱える子どもたちやことばに課題をもつ子どもたちへの支援をしています。

20 高機能自閉スペクトラム症児の早期発見について

健康科学大学クリニック 作業療法士 渡辺俊太郎

母子健康手帳の3歳までの記録を使用して、知的障害を伴わない自閉症スペクトラム児の特徴を捉える調査を行っています。自閉スペクトラム児の幼少期の社会性の特徴が母子手帳から見られるかという事を、途中経過ですが報告いたします。

21 わかりやすさを取り組みやすさにつなげる

～日頃の実践から考える3つのキーワード～

山梨大学教育学部附属中学校 教諭 松岡あすみ

活動のわかりやすさが取り組みやすさにつながると考え、学校生活における諸活動に主体的に取り組むために、学級担任や授業者としてどんな工夫ができるかを、学級生活や担当授業における実践の中で見つめなおした。

22 異文化交流を通して探求的な学びを実現する子ども

山梨大学教育学部附属小学校 教諭 長田雅基

今年度3学年の総合的な学習の時間では、カンボジアの小学校との交流を行っている。自分たちとは異なる文化をもつ子ども達とのより良い関わり方を考えていく中で、探求的な学びを実現するための教師の関わりについて考え、取り組んできた。その経過を発表する。

23 「カルピス」づくりをとおしたコミュニケーション・他者意図理解・協同活動の発達支援プログラム

実践女子大学 生活科学部生活文化学科 浦本愛・伊藤和佳・安部瑞帆
村上有咲・中田千絵・長田真由子
吉井勘人(山梨大学)・長崎勤(実践女子大学)

ダウン症のA児の3歳から7歳まで、「カルピス」づくりをとおして、コミュニケーション・他者意図理解・協同活動の発達支援プログラムを実施した。その結果、他者に好みのカルピスの種類をたずね、カフェごっこでは、役割を理解し、自発的に交代するようになり、協同活動が可能になっていった。

24 劇あそびをとおした物語理解・自己理解・「心の理解」の発達支援プログラム

実践女子大学 生活科学部生活文化学科 長田真由子・伊藤和佳・安部瑞帆
村上有咲・中田千絵・浦本愛
長崎 勤(実践女子大学)

パーソナル・ナラティブとフィクショナル・ストーリーの相互作用によって、「他者の心」が発達してゆくとの仮説で、「大きなかぶ」(4歳)→「三匹のこぶた」(5歳)→「おおかみと七匹のこやぎ」(6歳)→「赤ずきん」(7歳)の順番で指導を行ったところ、7歳での「赤ずきん」では、おおかみなど初めての役でも自発が80%以上で、劇という協同行為に参加し、他者の役割を自分のものに反転させた、垂直的越境活動(田島, 2017)がみられた。

25 ゲームをとおした社会性・協同活動の発達支援プログラム

実践女子大学 生活科学部生活文化学科 村上有咲・青木美緒・浦本愛
伊藤和佳・安部瑞帆・中田千絵・長田真由子
長崎 勤 (実践女子大学)

レベル1 サーキット→レベル2 On-offゲーム→椅子取りゲーム→レベル3
リレーゲーム→レベル4 フルーツバスケット→レベル5 かくれんぼ, 鬼ごっこ
→レベル6 得点・競争を伴うボールゲームの順で指導を行った。その結果, ゲー
ムを通して, 協同性, 社会性が促された。役割理解や, 役割交代は理解でき, チ
ームでゲームする「シェア(共有) (ギブ)」は楽しいが, 対戦相手との競争, 得
点, 勝ち・負け「個人の成果 (ゲット)」の理解が難しかった。

26 大学・学園祭での「なかよしカフェ」による典型発達者への障害理解支援

実践女子大学 生活科学部生活文化学科 安部瑞帆・村上有咲・青木美緒
浦本愛・伊藤和佳・中田千絵・長田真由子
長崎 勤(実践女子大学)

実践女子大学の学園祭で, 障害児がに「カルピス」をつくって学園祭参加者に
ふるまった。参加者に, 関わりの支援を行ったところ, アンケートで障害児のイ
メージが変わったと答える参加者の割合が多くなった。

27 地域とともに創る思春期キャリア支援プログラム

「キャリアデザインワーク」の実践

都留文科大学初等教育学科 内海里彩・白田大
村松夏帆 鈴木あかね
原まゆみ(都留文科大学特任教授)

発達障害等の困難がある中高生および若者の「学校から社会へ」の移行を支え
るワークショップである。働くことや人との関わりに関わる活動や職場体験に参
加し, 将来への関心や意欲を育てるプログラムを学生が企画運営している。地域
の教育・福祉・労働の専門家や事業所等の協力を得て実施している。

28 特別支援学校における食育の取り組み

山梨県公立学校食育推進研究会 特別支援ブロック
山梨大学教育学部附属特別支援学校 教諭 広瀬恵

山梨県内の特別支援学校10校の栄養士は, 食に関する正しい知識と, 望ましい
食習慣を身に付けることができるよう, 各学校で食育を行っている。食に関する
指導の取り組みや, 興味関心を高めたり知識を深めたりすることを目指し作成し
た教材を紹介する。

29 本年度の小学部研究に関連した学校生活における取り組み

山梨大学教育学部附属特別支援学校 教諭 岸本幸子

小学部高学年の日常生活の指導，生活単元学習，教科学習等の学校生活において，本年度の小学部研究と関連した取り組みを中心に授業実践を紹介する。

30 実感を伴って自己理解を高める「夢単元」の授業実践

山梨大学教育学部附属特別支援学校 教諭 波多野浩史

キャリア教育の基礎的・汎用的能力のうち，自己理解に焦点を当てて，学部カリキュラムの課題であった進路学習の充実と改善を図るために年間を通して行った授業実践について報告する。

31 学級生単の実践『ふんわか祭りをしよう！』

山梨大学教育学部附属特別支援学校 教諭 大脇知恵

本校中学部では，学級生単の授業において生徒の実態に応じた支援を活用した授業づくりを行っている。今年度は中学1年生の7名のうち6名が外部からの入学生という実態がある。学級の仲間としての関わりを深めながら，他教科での学びを生かし，主体的に活動する場として「ふんわか祭り」を計画した。その授業実践について紹介する。

32 主体的に行動しよう ～災害時に生かせる防災学習の取り組み～

山梨大学教育学部附属特別支援学校 教諭 志村美和

本校の防災教育における課題について，職員の意識の向上も含め，学校全体で取り組んできた防災教育についてまとめた。主に全体での予告無し訓練，防災体験学習，学部ごとの防災学習の積み重ねの重要性，特別支援における実際的な防災教育の大切さをまとめた。

33 高等部1学年における校内実習の実践

山梨大学教育学部附属特別支援学校 教諭 村田浩樹

産業現場等における実習に向けて，高等部1学年で取り組んだ校内実習についてまとめた。袋詰め作業や園芸作業，封筒作業など，種々の実習先で取り組んでいらっしゃる仕事を中心に，校内実習で取り組んだ。個に応じた支援を行いながら，働く意欲を高めた。

34 子どもと共に創り出す園生活

山梨大学教育学部附属幼稚園 教諭 吉岡良介

本園では、一人一人の子どもが園生活の主人公となり、子どもと保育者がともに生活を創り出していくことを目指している。本研究においては、年長児の実践事例から「共に創り出していく園生活」について考えていきたい。

35 作業学習における深い学びの在り方に関する一考察

高知県立伊野商業高等学校 教諭 片山裕吾

作業学習（印刷作業班）において、就労移行支援のためのチェックリストに基づき育てたい資質・能力を明確化した。目標の可視化や、働く意欲を高めることを重視して取り組んだ結果、作業量と持続力を向上させることができた。